

## 第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

テキストということだが、広義に使われはじめてから書物という概念は、次第に侵食を受けてきはじめている。ちょうど、学問のある分野が、それに携わる人々には、絶対的な範疇<sup>(注1)</sup>であるように見えながら、長い時間の射程で見れば、必ずしも外見ほどではなく、過渡的であるようなものである。

テキストということばは、**a**、テキスト理論といった枠組のなかでは、書物という形で表現される文学作品を対象としてはいる。**b**、文化記

号論の分野の立場では、テキストの概念は、書物という範疇を遥かに越えてしまった。**c**、テキストは、日本語でも本文とか、文献とか手本とか、教

科書ということばで表現されていたように、書物の下位概念であった。書物のなかには絵本とか、画集、あるいは楽譜のようなものも含まれていたから、テキストが、それらと並ぶ下位概念であつてもかまわなかつた。

ところが、テキストは文字という表現形態から解放されたため、文字を、あるいは印刷された活字を中心とした書物は、テキストが獲得した広汎なコミュニケーションの手段の一部に落ち着くことになった。

それでは拡大された概念としてのテキストの概念はどの程度までに広げられたのであろうか。テキストという表現の現在のところもつとも拡張された形は、文化テキストという用語である。この用語は、主として文化記号論、それもソヴイエトを中心に使われはじめたものであるが、今日書物の文化における位置を考えなおすために、もつとも頼りになる概念の一つであるように思われる。<sup>(注2)</sup>

文化記号論の考え方では、文化はテキストの集合体であるということになり、**A**ということになる。この文化という名のテキストは数多くの下位テキストからなっている。では、拡大された意味で使われるテキストとは何か。テキストとは、それぞれの下位の範疇において、「情報」を盛り込んで解読されるのを待っている**バイタイ**<sup>(ア)</sup>である。

「情報」とは、こういった文脈において、どのように理解され得るのであろうか。それは、まず、第一義的には、「混沌」とした表現を排して、一定の秩序に従つて、コード化された記号を介して、人間が自分の属している世界および、その構成要素を理解する手がかりである。情報理論において、情報はエントロピー<sup>(注3)</sup>に對立する要素としてとらえられる。極端な言い方をすれば、情報は一方の極においては、一義的な意味構造の担い手になろうとする傾向を持ち、エントロピーは多義的過ぎて、秩序のなかに入り切らない要素である。

テキストは、それ故二つの側面を持つ。まず、テキストは、テキストに包括できるものの限界を示す。つまり「外」と「内」の境界を示す。例えば、絵画テキストにおける外縁、または額縁は、「外」と区別することによって、絵画によって表現されるべき一定の美的秩序の単位を画定する。音楽においても、美的表現の単位として利用され得る音の上限と下限があり、始めと終りが、原則として時間の単位の基礎になっている。国家または一定の政治体

もテキストとして見ることができるとは、それが、**B**を持っていることよって明らかである。つまり、人間が何らかの意味でアイデンティティのより所としている事物は、一定の「外」と「内」を区別するリンカクを持つているということになる。(注4)

我々が課題としている「書物」に即して言えば、書物を覆っている表装は、既に「外」と「内」の区分を示す記号として作用している。書物の内容を暗示する装丁および表題は、内容を示すほかに、当の書物に属さない要素を排除するという記号性を帯びている。その外装が、明確なリンカクを持つているということを示すために、書物のページの外縁はサイダンされる。こうした秩序の明示は、細分化された形で書物の内側に持ち込まれる。扉とか奥付といった部分は「始まり」と「終り」を示すことによる単位の画定の試みの延長線上にある。

テキストが持つもう一つの側面は、内容にかかわる情報の提供という形をとる。情報は、ある意味では、静的な記号を介して、世界の量的な側面を伝達する一方の極性と、動的な記号を多用して、世界の質的な側面を表現するもう一つの極性に対比して、説明することができる。前者は、統計あるいは法のテキストにおけるように、一義的な意味の担い手としての記号にイキョウするのを原則とする。これに対して、美的情報という表現によっても規定することのできる後者の情報は、暗喩から詩的言語に至るまでさまざまな多義的表現の手段をクシして、情報が情報として成立するために排除せざるを得なかった、文化のなかで否定的な位置を与えられているさまざまな曖昧で、不確定的で、人々の安定したアイデンティティを揺さぶるような要素を、テキストのなかに取り戻したりつなぎとめたりしようとする。書物が、メッセージとして、人々の解読に供されるべきものとしてテキストのなかに組み込むのは、この二つの極の間の無数の変数である。

しかし、こうしたメッセージは、活字を単位として構成されている書物だけが担っているのではない。他の下位テキストも、それぞれのコードの配置によって行っているのである。芸術のさまざまなジャンルの作品が、それぞれこうした意味での下位テキストであることは、容易に理解され得るはずである。

例えば、演劇を、そのできるだけ大きい拡がりにおいて考えてみよう。演劇は、もちろん、戯曲という形で書物のなかに収まることができる。しかしながら、誰も、それが演劇の完成した、または潜在的なメッセージを充分に実現する形態であるとは思わないはずである。下位テキストとしての演劇は、どのような構成要素から成り立っているのだろうか。

本の外装が「内」と「外」といった読者における二つの異なった経験の空間の差異を明示すると同じような意味において、劇場は高度の記号性をクシして「内」と「外」の差異性を強調する。しかしながら、演劇または劇場における「内」と「外」の関係は外見ほど単純ではない。というのは劇場は、その本来の姿においては、住居空間の外縁部に位置するものであったので、その占める位置において、既に「外」または「内」と「外」の境界の表現でもあったからである。日本の文化史においても、劇場の原型の一つは、少なくとも村落レヴェルにおいては、村境の地蔵堂のような場所にあった。(注5)

地蔵堂というのは、村落に寺院が固定した制度として備わる以前に、村境に設えられた建造物であった。地蔵という表現が既に村境の十字路という両義的

な空間を背後に持っていた。したがって、寺院が村空間のなかに固定した後まで、「内」と「外」との境界としてのイメージを残すことになった。本来地蔵堂は外からやってくる遊行僧あるいは旅の僧、御師、<sup>(注6)</sup>旅芸人が宿泊するか、そこで死者の供養を行ったり、余興の芸を演じたりする場所であった。地蔵堂と似たようなイメージを喚起した空間として立所（たっしょ、塔所とも書く）、あるいは踊り場といった場所が挙げられる。いずれにしても、ここは、異形の人としての霊が姿を現わす場所であり、人間も人間ならぬ者の姿を演じることによって、霊の側に一時的に移行して異形性を帯びるといった空間であった。<sup>⑦</sup>地蔵堂が背負う、こうした両義的記号表現の故に、それは、劇場として演劇的に使われたのである。

（出典 山口昌男『文化の詩学』）

\* 出題の都合で省略部分や表記・表現を変えた箇所がある。

（注1） 範疇……同質・同類のものが含まれる範囲、種類、カテゴリー。

（注2） ソヴィエト……ソヴィエト社会主義共和国連邦（一九二二年～一九九一年）、社会主義国家。ロシア連邦の前身。

（注3） エントロピー……熱力学において物質の状態を表す量の一つ。情報理論では、情報の不確定さの度合い。

（注4） アイデンティティ……自分が他ならぬ自分であると感じられる感覚・意識。自己同一性。

（注5） 地蔵……釈迦の死後、弥勒菩薩が出現するまで、人々を教化し救う菩薩。日本では旅人や子供を守るとされる。

（注6） 御師……おし。神社に属した祈祷師。神社の信徒を相手に祈祷や宿泊の世話をした。

問1 傍線部(ア)～(オ)を漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の1～5のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は、ア 1 ・ イ 2 ・ ウ 3 ・ エ 4 ・ オ 5 。

(ア) バイタイ

1

- 1 祝宴にバイセキする。
- 2 バイシヨウ金を工面する。
- 3 効果がバイカする。
- 4 細菌をバイヨウする。
- 5 反応のシヨクバイを探す。

(イ) リンカク

2

- 1 式にリンセキする。
- 2 政治リンリを問う。
- 3 フウリンを楽しむ。
- 4 リンジンを助ける。
- 5 シャリンを点検する。

(ウ) サイダン

3

- 1 植物をサイバイする。
- 2 判事がサイテイを下す。
- 3 町でサイジを計画する。
- 4 現金でケツサイする。
- 5 会議をシユサイする。

(エ) イキヨ

4

- 1 投資でキヨリを得る。
- 2 提案をキヨゼツする。
- 3 判断のコンキヨを問う。
- 4 キヨゲンをもてあそぶ。
- 5 首相のキヨシユウに注目する。

(オ) クシ

5

- 1 ゴキブリをクジヨする。
- 2 コウクのゴミを拾う。
- 3 シンクの優勝旗を持つ。
- 4 春のクカイを計画する。
- 5 クロウを乗り越える。

問2 傍線部①「長い時間の射程で見れば、必ずしも外見ほどではなく、過渡的である」の理由として想定するのに不適当なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は  。

- 1 時間が経つ中で、新たに生まれた分野に吸収されるかもしれないから。
- 2 時代や環境の変化により、その一部が不必要になる可能性があるから。
- 3 その学問分野が発展拡大すると、他分野を組み込む可能性があるから。
- 4 時代が移り変わるとともに、学問を軽視する風潮が強まっていくから。
- 5 研究者の減少により、守備範囲の維持が困難になるかもしれないから。

問3

空欄

、

に入る語を、次のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は、

・

・

。

問4

空欄

に入る語句を、次のうちから一つ選べ。解答番号は  。

問4

空欄

1

そして

2

かつて

3

むしろ

4

すなわち

5

したがって

問4

空欄

1

しかし

2

つまり

3

そして

4

ところで

5

したがって

問4

空欄

1

かつて

2

むしろ

3

しかし

4

たしかに

5

あまつさえ

- 1 文化はテキストの代表である
- 2 文化自体がテキストである
- 3 文化はテキストの一部である
- 4 文化はテキストの下位概念
- 5 テキストは文化の中心部分

問 5 傍線部②「混沌」とした表現を排して、一定の秩序に従って、コード化された記号を介して、人間が自分の属している世界および、その構成要素を理解する」の説明として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は **11**。

- 1 例えば、ふだん使っている言葉について、言語学の方法で分析し、言語や社会の特質を抽出するといったこと。
- 2 例えば、自国の生活や経済を向上させるといふ問題について、各国の専門家から意見を聴取するといったこと。
- 3 例えば、自分が属しているボランティアのグループの方針について、全構成員が自由に討論するといったこと。
- 4 例えば、自分たちは何のために生きるべきかについて、有識者の意見をふまえて方向付けするといったこと。
- 5 例えば、自分たちの社会の本質について、さまざまな学問を学ぶことによって、正しく理解するといったこと。

問 6 傍線部③「二つの側面」の内容として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は **12**。

- 1 包括できる限界がどれほどかということと、その境界はどこかということ。
- 2 テキストには「内」と「外」、量と質という二つの区別があるということ。
- 3 どこまでがテキストの「内」に属し、どこからが「外」になるかということ。
- 4 どこまでが範囲かということと、内容としてどんな情報を含むかということ。
- 5 絵画においては額縁と表現内容、音楽においては音の上限と下限ということ。

問 7 空欄 **B** に入る語句を、次のうちから一つ選べ。解答番号は **13**。

- 1 議会
- 2 憲法
- 3 主権
- 4 軍隊
- 5 国境

問 8 傍線部④「動的な記号を多用して、世界の質的な側面を表現する」の結果と考えられる現象として適切なものを、次のうちから一つ選べ。

解答番号は 14。

- 1 多くの国民が統計学の理論を理解し、国勢調査に協力している。
- 2 「源氏物語」を、外国の大学で日本文学の専門家が研究している。
- 3 新型エンジンを搭載した日本製の自動車、世界中で走っている。
- 4 ニューオリンズ発のジャズが日本に入り、新しい音楽が生まれる。
- 5 「物理学概論」という本によって、物理の法則が人々に理解される。

問 9 傍線部⑤「この二つの極の間の無数の変数である」の説明として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- 1 「内」と「外」、秩序と曖昧、一義性と多義性、美的と詩的といった対立する要素が、不確定な割合で存在するものということ。
- 2 法律のような安定した文言の中に、詩的言語のような曖昧で排除せざるをえない要素が、不確定な割合で混入したものであるということ。
- 3 情報として一義的に理解できる部分と、筆者が読者の思考や感性に投げかけてくる種々の要素とが、複雑に絡み合ったものであるということ。
- 4 明確で誰にも理解できる情報と高度でわかりにくい芸術的な情報が互いにせめぎ合う結果、矛盾が顕在化してしまったものであるということ。
- 5 暗喩などの不確定な多義的表現を含む美的情報と、人々の安定したアイデンティティを揺さぶるような情報とが混在したものであるということ。



問10 傍線部⑥「高度の記号性をクシして「内」と「外」の差異性を強調する」の説明として適切なものを、次のうちから一つ選べ。

解答番号は 16。

- 1 建物の様式や装飾などの外見を工夫して、その内部が演劇上演の場であることを明示すること。
- 2 高度な記号を考案し、それを前面に押し出して、そこが演劇のための建物であると発信すること。
- 3 建物や看板をより目立つものすることによって、そこが他の劇場とは違うとアピールすること。
- 4 高度な演出によって、そこが村や町の集会場とは別次元の演劇空間であるように見せるということ。
- 5 演劇の場の原点であった地蔵堂をシンボルとし、他の建物との違いをはっきりと主張すること。

問11 傍線部⑦「地蔵堂が背負う、こうした両義的記号表現の故に、それは、劇場として演劇的に使われたのである」の説明として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- 1 地蔵堂は、遊行僧や旅芸人、御師などがそこで宿って死者の供養や余興の芸を行う、立所と同様な場所として知られ、異形の者である霊も現れて村人と交遊したことから、しだいに劇場としての役割を果たすようになったということ。
- 2 地蔵堂は、神聖な地蔵をまつっていたが、村境の十字路にあったので、いつしか遊行僧や旅芸人、異形の者としての霊が集まるようになり、村人と交流するようになったため、演劇的な劇場空間として使われ始めたということ。
- 3 地蔵堂は、地蔵を安置する場であったが、いつしか遊行僧や旅芸人、御師などがそこに泊まって死者の供養や余興の芸を行うようになり、そこへ村人や異形の者である霊が集うことで、結果として演劇的な場となったということ。
- 4 地蔵堂は、地蔵をまつり、村境の十字路という、村の「内」と「外」の境界にあることで、村人と遊行僧や旅芸人が交わる場であり、異形の者としての霊の世界を共に体験する空間であった、すなわち劇場空間であり得たということ。
- 5 地蔵堂は、遊行僧や旅芸人、御師などがそこで宿って供養や芸を行ううちに、霊と交流するようになり、好奇心を抱いた村人がそこに引き寄せられて集まるようになったことで、演劇を行う会場として定着していったということ。



## 第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

色彩にもまた近代の解放があった。

柳田国男は、このように記しています。柳田の『明治大正世相篇』という本は、「近代社会」の形成の中で、日本人の生活とその感覚がどのように変化したかを、豊富な事例と深い洞察力をもつて記した名著です。

この本の初めの三章を柳田は、「衣の変化」「食の変化」「住の変化」の記述にそれぞれ充てています。それと重ねて、一章では色彩と肌触りと音（視覚、触覚、聴覚）の変化、二章では味と香り（味覚、嗅覚）の変化が、考察されています。木綿の肌着の普及がどのように日本の若い男女の感覚をデリケートなものとしたか、など、どの部分の考察をとつても興味<sup>①</sup>のつきないものですが、ここでは日本人の感覚の歴史の、こまかい知識が目的ではなく、「近代社会」とはどのような生の世界であるかという、社会的な大きな主題に光を当てることが目的なので、柳田の記述の冒頭の部分、「色彩の感覚の変化」を考察した部分を、集中的に展開してみたいと思います。

柳田はまず、近代以前の人々の感覚を知る手がかりとして、

② 手向くるやむしりたがりし赤い花

という一茶の句を記しています。

この一句は、現代人であるぼくたちには、理解のできないものとなっています。言葉としてむつかしい言葉はひとつもない。「手向くる」は最近あまり使いませんが、仏さまに「供える」ということです。あとは「むしりたがった」「赤い花」ということで、<sup>(ア)</sup>カントン明瞭です。しかしこの句は、何を言おうとしているのだろうか。この句は一茶がとてもかわいがっていた、幼い女の子が病気で死んでしまったときに、<sup>(イ)</sup>悲しみを抑えてよんだものです。それが分かってもぼくたちにはそれほど「意味」が伝わらない。世界のあり方、存在するものに対する感覚が、現代とは全く異なっている世界を前提としているからです。ハナという日本語には、花・華／鼻・岬／初・端など、たくさんの意味があります。（初、端は、「しょっぱな」「ハナ初めから」等々の語に使います。）華は花の抽象化、岬は鼻のように出っ張ったところ、ということ、それぞれ同じ語であることはすぐわかりますが、／で区切った三つの系列（花と鼻と初）は、現代人には全然別の、たがいに無関係なコンセプトのように見えます。偶然の同音異義語にすぎないと。けれどもほんとうは、これらはみな同じゲンギで、古代の日本語のハナという、Aを指し示す言葉の用法たちです。（中略）

「花」とは何だったのだろうか。緑の莖や枝の先端などに、いきなり赤い花や青い花が咲く。あの赤い色や青い色は、今までどこに隠れていたのだろうか。子どものころ、ふしぎに思った人も多いと思います。考えれば「キセキ」みたいなものです。「ウラの世界」があると感覚していた時代の人間は、あの美しい色は「ウラの世界」に潜在していたと感じたにちがいません。エリアーデというガイハクな比較宗教学者の研究では、世界のさまざまな宗教に共通して、「ヒエロファニー」(「聖なるもの」のケンゲン)という考え方(感じられ方)があります。「聖なるもの」は、当然この世のものでなく「あの世」「かくり世」「ウラの世界」に属するものです。七色の虹や純白の鳥、朱の花や黄金色の花などの鮮烈なものは、この異次元の(聖なるもの)の、現世(うつし世)への出現態(「別世界の消息」と感覚された。

(注1) レヴィー・ストロースの『野生の思考』に、こういうエピソードが紹介されています。あるアメリカの原住民が、自分たちと白人との「主要な差異」として、近代人間の予想するさまざまな「大きなちがいがい」よりも先に、白人は平気で花を折るが自分たちは「花を折らない」ということを挙げた。比較社会学の核心に触れる問題であることをよく示している。

花はこの世にいっぱい咲き乱れている「ヒエロファニー」、感動と畏れに充ちたものたちのひとつだった。③日本でも江戸時代まではたとえ幼い子供であつても、花をむしめることは止められていた。死んで「あの世」の存在となったときに初めて、花は手向けてもらえるものだった。あんなにもむしりたがつていた花だよ。今やつとお前に手向けてあげることができるよ。と、一茶は最愛の娘に話しかけている。

柳田国男がこの箇所ですらうとしていることの中心は、「天然の禁色」ということでした。

「天然の禁色」というのは柳田国男の造語で、ふつうの「禁色」という言葉(もと)を基にしています。ふつうの禁色とは「制度としての禁色」、つまり色です。よく知られているのは一六二七(寛永四)年の「紫衣事件」です。これは朝廷と幕府との権力闘争の焦点でした。特別

に位の高い僧侶だけに紫の衣を許可することは朝廷の権限でしたが、徳川幕府の権威を確立する一環として、幕府があらかじめこれを認可した場合に限るということにした。後水尾天皇は朝廷の権威を守り通すべく、幕府の認可なしに沢庵和尚に紫衣を着せる。幕府側はこれを認めず、沢庵和尚は流罪、後水尾天皇は退位に至る。「色彩」の問題は、天皇の退位に至る社会問題であつたわけです。

④この事件には、世界史的な背景がある。ローマの時代に「帝王紫」と呼ばれた貝紫は、天然の染料が出せる最も高麗な色彩といわれ、ローマの皇帝たちが競って手に入れようとした。(注2) フェニキアのシドンやティルスは聖書にも出てくる都市ですが(ローマと覇権を争ったカルタゴはティルスの植民地でした)、これらの都市は「貝紫で栄えた」といわれています。もちろん誇張した表現ですが、それくらい重要な貿易の品目でした。この「貝紫」はユーラシア交易のルートを通じて中国に伝えられる。もともと中国では黄色が最も貴い色とされてきたが、この貝紫があまりに高麗な色彩なので、王侯貴族が紫の方を貴ぶようになる。保守主義者である孔子が「紫が天下を乱す」と言って嘆いたくらいです。日本の聖徳太子が中国の制度にならって古代国家の初めてのシステム形

成をしようとしたとき、冠位十二階の最高位に「紫」を置いたことには、ユーラシア幾百年の歴史の背景があった。日本の禁色には紫のほかに、くちなし、おうだん黄丹、しんぴ深緋、しんすおう深蘇芳がありますが、もともと、花などの色彩の鮮明なものに対する、この時代の人間たちの強烈な感動と畏れの感覚を前提とし、この色彩を権力が排他的に帯身し、あるいは配分することを通して、権力への畏怖畏敬の感覚に転化すること（社会学の用語でいうと感覚の権力による〈水路づけ〉）に、<sup>⑤</sup>禁色の社会的な本質はあったといえます。

この「禁色」と対比して柳田国男が「天然の禁色」と名づけているのは、権力による支配ではなく、Cともいべき禁色でした。この時代の日本人は、染料技術的には相当に派手な色彩も使用できたのですが、色彩には「わざわざくすみをかけて」地味な色彩として用いていたという。柳田はこのこと理由について、それは人々が色彩について、「あまりにaであった」結果であると観察しています。別のところでは、「あまりにbなるゆえに」鮮明な色彩は用いることができなかつたのだと書いています。似たような心の動きは、例えば純白の衣類（カミシモなど）を、イロギ、イロカミシモ、イロギガミなどと、隠語化して表現する言い方にも表れています。「白」という色は、あまりに「清すぎ、また、明らかすぎた」から、いわば、電流の流れているような言葉で、ストレートに口にすることを避ける心理が働いていた。「天然の禁色」ということ背景には、<sup>⑥</sup>人々の感受力、あるいは感動能力ともいべきものの、強さ、鮮烈さが存在していた。

柳田はこの「天然の禁色」の社会心理の特質として、二つのことを挙げている。第一に自発的なコントロール、「特に制度を立てて禁止された」抑制ではないということ、第二に感覚的なコントロール、「必ずしも計算の結果ではなく」ということ。

<sup>⑦</sup>柳田がその生涯で、中央官僚としてのかくかく赫々たる地位をなげうって民俗学の研究に専心することとしたのも、ほんとうによい社会を形成してゆく基盤の力を、「法令で社会制度を造れるかのごとく誤認する」権力の手法ではなく、民衆自身のこの自発的、感覚的な心性の内に見いだそうとしたからだった。

（出典 見田宗介『社会学入門―人間と社会の未来』）

\* 出題の都合上、文言や傍点を省略した箇所がある。

（注1） レヴィ・ストロース：一九〇八―二〇〇九。フランスの社会人類学者、民族学者。構造主義の祖とされる。

（注2） フェニキア：古代の地中海東岸にあった地域の名。シリアの一角。その地域において海上交易で活躍した人々。

問1 傍線部(ア)～(オ)を漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の1～5のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は、ア 18 ・ イ 19 ・ ウ 20 ・ エ 21 ・ オ 22。

(ア) カンタン

18

- 1 教室内のカンキを行う。
- 2 カンセン症にかかる。
- 3 カンゼンと立ち向かう。
- 4 カンカクを空けて座る。
- 5 友にシヨカンを送る。

(イ) ゲンギ

19

- 1 大学でコウギを聴く。
- 2 ギカイを解散する。
- 3 テキギ判断する。
- 4 ギジ的な体験をする。
- 5 イギを正して臨む。

(ウ) キセキ

20

- 1 販売でジツセキをあげる。
- 2 セキネンの恨みを晴らす。
- 3 セキガンの剣客に会う。
- 4 先人のソクセキをたどる。
- 5 異論をハイセキしない。

(エ) ガイハク

21

- 1 条件にガイトウする。
- 2 事件のガイヨウを説明する。
- 3 悔いのないシヨウガイだ。
- 4 思潮をダンガイする。
- 5 ひたすらカンガイにふける。

(オ) ケンゲン

22

- 1 犯罪のケンギがかかる。
- 2 安全性をケンサする。
- 3 善行をケンシヨウする。
- 4 彼は役目をケムした。
- 5 ケンジヨウ語を使う。

問 2 傍線部①「興趣のつきない」の意味として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- 1 風流な
- 2 格調高い
- 3 学術的な
- 4 面白そうな
- 5 興味を引かない

問 3 傍線部②「手向くるやむしりたがりし赤い花」の表現内容としてもっとも適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- 1 女兒の願いを拒んだことへの悔恨。
- 2 女兒と赤い花の因縁を受容する気持ち。
- 3 女兒のわがままを懐かしむ気持ち。
- 4 禁忌を乗り越えてまで供養する心痛。
- 5 禁忌を前提としての女兒への哀悼。

問 4 空欄 A に入る語句を、次のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- 1 一つの物事の始まりをさまざまな角度から眺めた結果
- 2 ものごとの「気の集中する先端」みたいな部分や現象
- 3 抽象性と具象性を兼ね備えたとらえどころのないモノ
- 4 花と鼻と端が共通に持っていたスピリチュアルなもの
- 5 現代人には理解できないような霊的かつ根源的な存在

問5 傍線部③「日本でも江戸時代まではたとえ幼い子供であっても、花をむしることは止められていた」の理由として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- 1 花は鮮烈な美しさを持つ聖なる存在として畏敬の対象であったから。
- 2 花は「あの世」を象徴する不吉なものゆえ、人々に禁忌されたから。
- 3 花をむしる行為の非合理を幼い子供にも教え諭す必要があったから。
- 4 花は高価で、死者の手向けに用いる以外には手に入らなかったから。
- 5 花は感動と畏れに満ちた存在だと子供にも気付いてほしかったから。

問6

空欄

B

に入る語句を、次のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- 1 ふつうの人々が長年の慣習により使用を自粛していた
- 2 各時代を通して人々が合議して使わないと決めていた
- 3 古代から続く律令制度によって使用を禁止されていた
- 4 幕府と朝廷の協議によって、庶民が使うことを禁じていた
- 5 権力によってふつうの人間には使うことを禁じられていた



問7 傍線部④「この事件には、世界史的な背景がある」の説明として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- 1 日本で紫色を最も高貴としたのは、中国文化よりもローマ文化を重んじた結果であるということ。
- 2 紫衣事件は、ローマ時代の紫尊重が中国経由で日本へ伝わったことにつながっているということ。
- 3 紫衣事件のような社会問題の発生は、早く古代の中国で孔子によって予見されていたということ。
- 4 紫衣事件には、ローマの皇帝たちの貝紫の争奪競争に起因する貿易利権が絡んでいたということ。
- 5 孔子の黄色尊重に対して聖徳太子が紫色を最上としたことが紫衣事件の遠因であったということ。

問8 傍線部⑤「禁色の社会的な本質」の説明として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- 1 民衆が感動し、畏れを抱くような鮮やかな色を排他的に創りだして普及させることで利権を強化しようとする事。
- 2 民衆の色への思いを利用し、さまざまな場面で用いる色を細かく規定して政治への関心をそらそうとすること。
- 3 人間が花などの色に感動しやすい性質を利用し、民衆が好む色を多用して権力者の好感度を上げようとする事。
- 4 民衆に花などの色彩への畏れを抱かせ、その感覚を思い出させることで権力への畏怖を定着させようとする事。
- 5 ある色彩に対する民衆の特別な感じ方を利用して、その色を独占的に扱うことで支配力を高めようとする事。

問9 空欄 C に入る語句を、次のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- 1 自然には存在するが人間にはどうしても出せない色
- 2 作り出すことが大変難しかったため、あえて避けてきた
- 3 権力による支配ではなく、民衆の自発的な社会心理
- 4 歴史的な事実を背景に、人々に共有されてきた感性
- 5 派手を忌避して地味な色を選ぶ、権力への防衛本能

問10 空欄 a と b に入る語の組合せとして適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- |   |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|
| 1 | a | 鈍感 | b | 凡庸 |
| 2 | a | 鋭敏 | b | 痛切 |
| 3 | a | 無知 | b | 臆病 |
| 4 | a | 頑固 | b | 頑な |
| 5 | a | 繊細 | b | 病的 |

問11 傍線部⑥「人々の感受力、あるいは感動能力」の内容として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- 1 「白」をあまりに清らかで明るいと感じて、「イロギ」などと言い換えるような感覚。
- 2 あまりに強烈なものを避ける心理から、地味なくすんだ色を好むようになった感覚。
- 3 何事に関しても直接的に言い表すことを避け、隠語を發達させてきた言語感覚。
- 4 繊細で控えめであるため、永らく権力者に利用されてきた民衆に共通する感性。
- 5 「わざわざくすみをかけて」色彩を用いるなど、慎重で臆病とも言える感受性。

問12 傍線部⑦「法令で社会制度を造れるかのごとく誤認する」権力の手法」の内容として適切なものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- 1 政治を行う者の、法律家に頼って社会制度を作り、人々の考えや生活に配慮せずに彼等を弾圧する非情な態度。
- 2 権力を持つ者の、社会制度を形成するものが法令よりも人々の意志だということを見無視した自信過剰な施策。
- 3 権力者の、社会制度を築くには法令だけでは足りないという事実を背に向けたまま法律を作り続ける惰性的な方法。
- 4 為政者の考える、社会制度は法律を作って人々に周知し、守らせることによって形成されるという誤ったやり方。
- 5 政治家の、社会制度作りには法令以外に資金や人材など多くの必要条件があることに思い至らない軽薄な思考。

問13 本文の内容に合致するものを、次のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- 1 比較社会学者のレヴィ・ストロースは、アメリカの原住民と白人との差異を「平気で花を折るか否か」に見出し、それが近代化の指標の一つであることを発見した。
- 2 江戸時代の紫衣事件で顕在化した「禁色」という概念は、ローマ時代にシドンやティルスなどの都市国家で天然染料として珍重された「帝王紫」を源流としている。
- 3 柳田国男は、一茶の句に近代以前の民衆に内在する言わば「天然の禁色」を見出し、その民衆の感覚的、自発的な感性こそが社会を形成する基盤であると考えた。
- 4 現在、日本の禁色には紫のほかに、くちなし、黄丹、深緋、深蘇芳があるが、これは鮮明なものに対する日本人の「畏れ」の感覚を反映したものにほかならない。
- 5 ハナという日本語には、花・華／鼻・岬／初・端など、たくさんの意味があるが、それらは／で区切った全然別の三つの系列に大別できることがわかってきた。